

## 国際シンポジウム「現代中国の社会変容と東アジアの新環境」参加記

坂井田夕起子

### I シンポジウム概要

2007年8月27日から28日の2日間、天津の南開大学において、国際シンポジウム「現代中国の社会変容と東アジアの新環境」が開催された。このシンポジウムは、2004年に始まる大阪外国語大学中国文化フォーラムのプロジェクトの一環である。

中国文化フォーラムとは、大阪外国語大学において蓄積されてきた地域研究の知的財産を大阪大学との統合後も継承、発展させていくための試みであるという。近年の「大学改革」の中、筆者の周囲でも歴史や地域研究に関わる研究室がいくつも縮小され、形を変えるなどしている。大阪外国語大学の地域研究が、中国文化フォーラムという場において活動を継承していくという形は、非常にユニークな試みであるといえよう。

(大阪外国語大学中国文化フォーラムの詳細は以下の URL 参照

<http://homewww.osaka-gaidai.ac.jp/~c-forum/>)

今回の天津南開大学における国際シンポジウムは、2004年に内モンゴルで開催されたものに続き2回目になる。開催主体は、大阪外国語大学中国文化フォーラム、南開大学歴史学院、台湾の国立華東大学歴史学系および中国現代史学会で、各大学の関係者を中心におよそ52人の参加者があった。報告者の内訳は中国から26名、日本から20名、台湾から6名である。会議の開催に際しては、会場からさまざまな事務処理までを担ったのは江沛教授を中心とする南開大学歴史学院であった。

さて、セミナーの初日は、2つの会場で午前と午後を通して6つの分科会が準備され、1セッションごとに1人ないしは2人のコメンテーターが付く形で25の報告と討論が行われた。また2日目は一つの会場に全員が集まり4つの分科会が準備され、24の報告と討論が繰り返された。なお、報告された論文(すべてではないが)は加筆訂正され、シンポジウムで報告されなかった論文も加えて、2008年3月に汲古書院から刊行される予定である。

筆者は今回の国際シンポジウムプロジェクトに途中から参加させていただいたため、準

備段階からの状況を全て把握しているというわけではない。また、シンポジウム終了後かなりたってから参加記を依頼されたこともあって、当日の内容を正確に紹介する自信もない。「会議手冊」をたどりながらシンポジウムの概要紹介と個人的感想を述べることで責めを塞ぐことをお許しいただきたい。

## Ⅱ シンポジウム日程

### ■ 8月27日

8:30~9:00 開幕式

司会：江沛教授（南開大学歴史学院）

- 主催者挨拶：1、魏宏運教授（中国現代史学会名誉会長）  
2、西村成雄教授（大阪外国語大学教授）  
3、張力教授（国立東華大学人文社会科学学院長）

〈記念撮影〉



第一セッション「東亜格局變動下的中国東三省」 9:30~11:30

コメンテーター 許育銘

- 小都晶子「“満洲国”初期日本人移民用地的取得和中国東北地区社会：以“三江省”樺川  
県為事例」
- 上田貴子「關於山東移民送出的變遷」
- 青柳伸子「關於1930年代延辺地区的抗日運動」
- 李海浜「論1933~34年中日間關於關内外通車交涉」

第二セッション 「1920 - 30 年代の中外関係」 9 : 30 ~ 11 : 30

コメンテーター 陳進金

- 根岸智代「1936 年 I P R 玉斯美脱 (Yosemite) 会議与日本和中国代表团」
- 前田輝人「抗日戦争期の“日本人社会在上海”」
- 李永勝「列強承認 1923 年中国《商標》之經過」

コメンテーター 西村成雄

- 康越「論張学良政權下的最高行政機構：東北政務委員会」
- 秦熠「“權自我操”与“組織鐵路委員会”之間——中外鐵路路權爭議研究」

第三セッション 「現代中国交通体系与社会變動」 14 : 10 ~ 16 : 00

コメンテーター 王先明

- 熊亜平「鐵路与城鄉經濟關係的重構」
- 郭海成「隴海鐵路与関中近代化進程論略：1931 - 1945」
- 趙志強「近代華北煤炭運銷体系：1905 - 1937」
- 劉暉「鐵路与鄭州棉業的發展」

第四セッション 「边疆觀念与政治思想」 14 : 10 ~ 16 : 00

コメンテーター 鄭麗蘭

- 島田美和「顧頡剛的“疆域”概念和“边疆”研究」
- 宝麗娜「張君勱的憲政思想及其实践評析」

コメンテーター 蔣竹山

- 遲曉静「中国民主社会党的憲政思想探析」
- 渡辺直土「胡錦濤政權的政治思想：以“和諧社会”論為中心」

第五セッション 「当代中国農村，職業与環境問題」 16 : 0 ~ 17 : 40

コメンテーター 陳元朋

- 阿古智子「後鄧小平時代中国農村的權利結合和關係網絡：着眼于基層的政治和社会力学」
- 日野みどり「初探現代中国的職業觀：圍繞“敬業”概念」
- 曹牧「近五年来工業化与松花江流域的水污染」



第六セッション 「中日互動与兒童教育」 16:10~17:40

コメンテーター 田中仁

- 田淵陽子「1945年“内蒙古人民共和国臨時政府”的樹立和崩潰」
- 坂井田夕起子「玄奘三藏法師為何來日本？：玄奘遺骨掠奪說法及其歷史的變遷」

コメンテーター 許衛東

- 宮崎いづみ「在中国的“日本”：中国近現代外語教育的變遷与日語學習，教學現狀」
- 鄒燦「六一兒童節与当代中国政治文化傳播」
- 鬼頭今日子「当代日本高中的中文教育」

■ 8月28日

第七セッション 「思想，社会与政治」 8:00~10:10

コメンテーター 李道緝

- 堤一昭「蒙元時代（公元13~14世紀）‘中国’的擴大和正当性的多元化」
- 李喜所「調適与会通：嚴復的社会和諧思想」
- 趙永東「高等教育市場化：中日比較的視角」

コメンテーター 李金錚

- 王先明「制度變遷，革命話語与鄉紳階層——20世紀前期鄉紳階層消退的歷史軌跡」
- 鄭麗蘭「制憲權危機与民初權力制度化的失敗」
- 田中仁「試論抗日戰爭前期中国共產党敵党軍關係」

第八セッション 「中国的現代化進程与東亞国际關係」 10:20~12:30

コメンテーター 張力

- 江沛「清末中国人有關鐵路論争述評」
- 毛立坤「清末中国外貿的新格局——以香港轉口貿易為例」
- 李道緝「僑資与稅務改革——以“中華民國僑資事業協進會”為中心的探討」

コメンテーター 秋田茂

- 許衛東「日本經濟結合的轉變与日中經濟合作的展望」
- 山田康博「冷戰後東亞国际秩序的演變与中国」
- 五島文雄「中国崛起和東南亞的關係」

第九セッション 「地方勢力与抗戰前後中外關係」 14:00~16:00

コメンテーター 江沛

- 西村成雄「中原大戰後，東北華北政治空間的新段階」
- 陳進金「挑戰中央：兩湖事變期間桂系軍人的和与戰」
- 臧運祜「抗戰中後期日本的“重慶工作”：1941—1945」

コメンテーター 李永勝

- 張力「中義外交関係の重建, 1943 - 1949」
- 許育銘「戦後処理与地縁政治下の国民政府对琉政策」
- 秋田茂「1930 - 50年代の東亜国際経済秩序」
- 張偉偉「無中心全球史中的近現代中国与東亜新格局」

第十セッション 「民衆生活史与身体史」 16:20~18:30

コメンテーター 西村成雄

- 蔣竹山「新知識, 新消費; 清代中日人参消費指南書籍的比較研究」
- 李金錚「収入増長与絶対貧困——20世紀上半期冀中定県農家生活水平考」
- 侯杰「從“医人”到“医国”: 孫中山在東亜」

コメンテーター 侯杰

- 陳元朋「身体, 権力与認同: 中国文化中“身体”的实际与虚構——近世士人飲饌文中的身体感与边界建構」
- 宮原暁「作為隱喻的身体和“中国人”印象: 比律賓華人研究的現行政治解釈和類型劃分的可能性」

18:40~19:10 閉幕式

司会: 西村成雄教授

- 1, 大会総括報告 許育銘教授 (国立東華大学), 田中仁教授 (大阪外国語大学), 江沛教授。
- 2, 大会感想: 張力教授 (国立東華大学), 秋田茂教授 (大阪大学), 宮原暁准教授 (大阪外国語大学), 日野みどり教授 (金城学院大学), 李金錚教授 (南開大学), 侯杰教授 (南開大学)
- 3, 閉幕

■ 8月29日

午前: 梁啓超記念館, 静園, 周恩来記念館の参観

午後: 石家大院, 楊柳青年画印刷流程の参観

夕方: レセプションパーティー

### III 若干の感想

今回、「現代中国社会変動と東アジア新環境」シンポジウムに参加して驚いたのは、その議論される内容の豊富さである。例えば、シンポジウムのキーワードは「現代中国」と「東アジア」であり、多くの報告が清から現代までの時間軸の中で報告を行っているが、しかしそれだけにとどまらなかった。例えば、堤報告は元代における「中国」という地域概念

の拡大と支配の正統性原理の多元化を論じているし、陳元朋報告は、宋代から清代にかけての知識人によるテキスト分析に焦点をあてているなど、より長いスパンで現代中国にいたる問題を論じている報告が多かった。

また、地域的にも多様な広がりを持ち、「中国」を中心とする「東アジア」——すなわち日本および内モンゴル、朝鮮半島、

台湾、東南アジアなどとの関係、そして、それら地域に多大な影響を与えてきたアメリカやイギリス、イタリアなどの関係にも報告は及び、まさにグローバル化が進む現代の「社会変動」「新環境」を論じるにふさわしい豊富な内容を持つものであった。そして、「社会変動」や「新環境」といったキーワードから予想される政治、経済、歴史方面だけでなく、例えば日本における中国語教育を論じた鬼頭報告や中国における日本語教育を分析した宮崎報告など、現場経験に基づくミクロな視点からの報告や、高等教育の市場化と日中比較によって問題提起を試みた趙永東報告などは、今日のグローバル化とそれによって大きく変化する社会のありようを論じたものであった。

さらには、清代の朝鮮人参の消費と流通の分析からブランド化、日中の人参消費に関する案内書の比較をした蔣竹山報告や、19世紀半ばから現代にいたるまでの複雑な移住行動を繰り返した「華僑」でもなく、「華人」でもない「チャイニーズ」たちのアイデンティティを考察した宮原報告など、文化的方面でも興味深い報告がなされた。

このように、多様な視点からの報告が一つの会場で聞けたことは非常に有意義であり、シンポジウム参加者の多くが同様の感想を語っていた。また、大学教授から院生までの幅広い参加者が皆それぞれにセッションに参加し、報告できたことも貴重な経験であり、とくに、中国や台湾の参加者からは評価の高い部分であった。

しかし、一方で広汎な分野の多様な報告者を短期間のシンポジウムスケジュールにまとめることは至難である。シンポジウム各セッションの報告は、一律10分であり、日本側は直前まで報告時間の5分延長を希望していたが、結局実現しなかった。コメンテータ各氏の持ち時間も担当報告数を問わず10分であった。このため、一日目の分科会はフロアからの質疑にも答えられる十分な時間がとれたセッションもあれば、報告数が多いためにコメンテーターの質問に簡単に答えることがやっとのセッションもあった。また2日目は一つの会場で全員が参加するセッションだったにも関わらず、報告数が多く、コメンテーターの発言にのみ限定されてしまったのも残念だったのではないだろうか。

さらに当日の使用言語の問題もある。各セッションは中国語（普通語）を用いて行われ、それ以外の言語報告者には中国語の通訳がつき、各報告に日本語版・中国語版双方の要約



が配布された。そして、英語や日本語で報告をした参加者がフロアで聴衆となる場合には、大阪外国語大学の院生やOGたちがそれぞれに通訳として付いた。しかし、若手研究者複数に通訳の個別対応に追われるという状況は（時間的制約ということも考慮しても）シンポジウムとしてベストな形式ではないだろう。多様な参加者をどのように議論に取り込んでいくかという課題は、事前準備も含めて今後の課題でもあると思われる。

今回のシンポジウムは、各地で研究を続ける研究者たちが大阪外国語大学中国文化フォーラムとして国内外から多数集まり、「中国」を中心とした「東アジア」諸地域の幅広い分野にわたって、多様な視点から議論することを目指したものであり、その目標は十分に達成されたと筆者は理解している。今後これらの議論を深め、発展させていくためには、テーマをしぼってさらにシンポジウム開催などを継続していく必要があると思われる（今回の国際シンポジウムも既に準備を開始しているとの話も聞く）。今回のシンポジウムにおいて議論された豊富な内容がどのように深められていくのか、大阪大学と合併した大阪外国語大学の中国文化フォーラムの活動がどのような方向に発展していくのか、今後も期待を持って参加させていただきたいと考えている。なお、各報告の要旨は以下のURLにて参照可能である。

<http://homewww.osaka-gaidai.ac.jp/~c-forum/box3/tianjin-lunwentiyao.htm>

（さかいだ ゆきこ・大阪教育大学非常勤講師）